

事例3-1 杉並区立杉森中学校（・杉並第一小学校、馬橋小学校）

総合的な学習の時間

単元名

中学校全学年

◆◇ めざせ！ コスモポリタン ◇◆

～外国語教育における相互承認の感度の向上～

1 2030年を生きる子どもたちに身に付けさせたい力と教師・学校の役割

(1) 杉並区立杉森中学校（・杉並第一小学校、馬橋小学校）

杉森中学校を特徴付ける事柄の一つに、地域運営学校としての特色である English Summer School (ESS) の充実が挙げられる。この取組は毎年継続して行われており、平成28年度はセミナーハウスで2泊3日の日程、6名の外国人講師の下、まさしく「英語漬け」と表現しても過言ではない環境で体験活動を行った。英語での自己紹介に始まり、自分の班の担当である外国人講師を紹介するポスター作りなど様々なコミュニケーション活動を経て、最終日は英語劇を行うといった内容である。

また、土曜授業では、本項で取り上げる「めざせ！コスモポリタン」の活動が行われている。

このように、本校では外国語教育を、一方では英語科で行われる教科指導、もう一方では「総合的な学習の時間」で取扱われる英語活動の2側面から推進しており、それらを意図的且つ有機的に関連させ、学習効果の向上につなげている。

(2) 育成を目指す資質・能力

昨今の加速度的なグローバル化の中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。教育の中で語られるグローバル化とは、同一のフォーマットを全世界に展開することではなく、国や地域ごとの実情や特色を、主にコミュニケーションを介して理解し、あらゆる活動において反映されることを指すと考えられる。

つまり、グローバル化は「画一化」ではなく、むしろ「多様化」であると考えられる。

2 多様で一貫性のある総合的な学びにおける本単元の位置付け

	就学前	小学校			
		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
系統性	異なる文化に触れる活動に親しむ。	外国語を通じて、異なる文化に触れ、友達との関わりを大切に外国語に慣れ親しむ活動や日常生活・学校生活に関わる活動、国際理解に関わる交流等を含んだ体験的なコミュニケーション活動等を行うようにする。			
連続性	社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどを養う。	①英語と触れ合う _____			
協働	幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同研究の機会を設けたりする。	〔学 校 外〕 小中連携校の特に外国人講師については、文化理解を中心に簡単な英語でスピーチしてもらい、外国人から見た日本の伝統や文化についても触れてもらう。 〔異校種間〕 小学校で取り組んでいる外国語活動の内容や教育的効果について十分な共通理解を図る。			



I 小中一貫教育
理論編

II 総合的な学び
理論編

III 総合的な学び
実践編
就学前

III 総合的な学び
実践編
小学校

III 総合的な学び
実践編
中学校

IV 資料編

本校では、このように多様化が求められる社会の中で活躍を期待されている子どもたちが、総合的な学習の時間で英語のルーツや多言語との共通点、コミュニケーションツールとしての英語の役割や楽しさを見いだすといった探究的な学習に取り組み、英語と向き合うといった場を設定している。英語を単なる言語として捉えるのではなく、その背景にある文化を社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、情報や自分の考え等を形成、整理、再構築することが求められる。

すなわち、本活動を通じ、外国語能力を身に付け、国際競争の場で活躍するグローバルな人材の育成のみでなく、生徒たちに、言語や文化の違いを超える相互承認の感度を育んでいくものであると考える。

- 外国語を通じて、言語やその背景にある文化を尊重しようとする態度
- 自律的・主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度
- 他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、外国語で聞いたり読んだりしたことを活用して、情報や考えなどを外国語で話したり書いたりして表現しようとする態度
- 外国語を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現するとともに他者を理解するなど互いの存在について理解を深め、尊重しようとする態度

		中学校			
第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年	
→		小学校における外国語活動を通じて、音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されることを踏まえ、各学年の学習状況に応じたコミュニケーション活動を行う。			系統性
		めざせ! コスモポリタン			連続性
②課題をもつ		→			
③実践する		→			
〔自校内〕学級や学年の担当間で教材理解及び教材研究についての共通理解を図る。					協働

3 学びを通じた成長

(1) 子どもたちの活動する姿

単元の学習・指導と評価の計画 (20 時間)

時	◎目標	○主な指導事項 ・指導上の留意点
1	◎ALT の出身国について理解しよう	○外国人講師の母国について理解する ・日本との相違点について整理する
2～16	◎ESS に取り組もう (事前学習 4 時間含む)	○仲間と協力しながら英語劇を発表する ・セリフ等も自分たちで考え、独創的にする
17	◎道案内をしよう	○東京を訪れた外国人に道案内をする ・ルート案内だけにとどまらないよう留意する
18	◎日本の食文化について 理解を深めよう	○和食のよさについて理解を深める ・食事作法についても理解する
19	◎自分のふるさとについて アピールしよう	○地元「阿佐ヶ谷・高円寺」をアピールする ・見所や祭りについて、そのよさに着目する
20	◎自分の意見を表明しよう	○様々な場面を想定し自分の意見を述べる ・安易に Yes と答えさせないよう留意する



様々な国籍の外国人講師の協力を得ながら、コミュニケーション活動に取り組む。

全ての子どもに、言語や文化の違いを超える相互承認の感度を育てていくとなれば、発声・発音の仕方の他、直接触れ合わないと感じることができない外国人講師のパーソナリティ等も含めて異文化を感じ、興味・関心を持ち、異言語習得につなげていくといった過程が非常に重要な意味をなす。

(2) 子どもたちの成長

平成 27 年度の土曜授業実施後、全校生徒（330 名）を対象にアンケート調査を実施した。「外国人の方とのやりとりに自信が付いたか」との質問項目に対して、89%の生徒が肯定的な回答をした（図 1）。直接的な体験学習の結果、外国人に対しても物怖じせず交流する素地ができつつあることが分かる。また、「次年度もこのような活動がしたいか」との項目に対しては、95%の生徒が肯定的な回答をした（図 2）。国際社会に向けた体験学習に対して、意欲的に取り組みたい生徒が多いことが分かる。今後も内容を工夫・改善しながら取組を継続する。

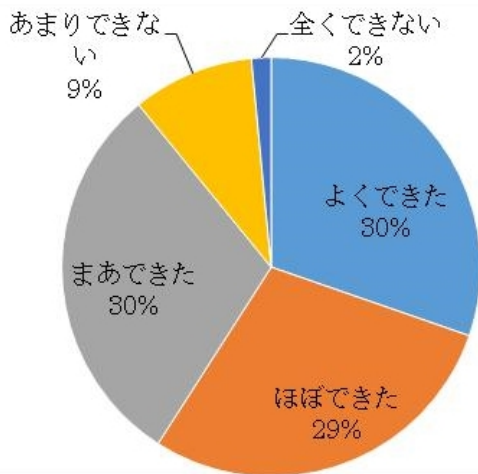


図 1 外国人とのやりとりに自信が付いた

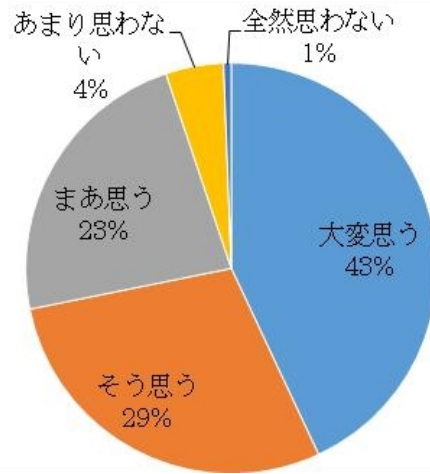


図 2 次年度も外国人講師との交流活動をしてみたい

4 学びのつながり、人の生かし合い

(1) 学びのつながり

本単元は、中学校が学区の 2 校の小学校（杉並第一小学校・馬橋小学校）と連携を図りながら、総合的な学習の時間に位置付け、組織的・計画的に取り組んでいる教育活動である。英語の授業で学習する基礎的・基本的な知識・技能はもちろん、これらの知識・技能を活用して喫緊の課題を解決するための思考力・判断力・表現力及び学習意欲の要素を児童・生徒の発達段階を踏まえ調和的に定着・育成することを重視している。一斉授業で知識や技能を定着させるだけでなく、問題の解決や複合的な探究活動の過程においては、級友と協働して問題を解決しようとする学習活動や、言語により比較・検討・分析し、まとめたり表現したりするなど、自分たちの意見や考えを他者に発信する言語活動が求められる。小学校の段階から英語に慣れ親しみ、中学校では実際に外国人と交流しながら体験的に英語を体得し、国際化社会の中で堂々と自身の意見や主張を展開する意欲や態度を育成することが重要であると考えられる。

ア 学校と社会をつなぐ学び（社会に開かれた教育課程）

外国語教育は学校教育のみで完結するといった考えではなく、地域・保護者にも理解を求めていく必要がある。グローバル化は「画一化」ではなく、むしろ「多様化」であるという考えを、本単元の活動を通して発信し、未来を拓く人材の育成といった大きな目標につなげている。

イ 系統性・連続性を確保した学び

①指導目標・内容（事項）の【系統性】

コミュニケーションツールとしての英語を主体的に学び、英語への興味関心を高め、英語（外国語活動）の授業に積極的に取り組む態度を養うとともに、学びをつなげ、切れ目のない教育（小学校の外国語活動を生かす）を実現する。英語の指導において系統性をもたせるために、小中連携会議の英語科部会の中で意見交換を定期的実施している。

②学習と評価の方法の【連続性】

小学校の外国語活動で学習した言語材料と、中学校の英語の授業で学ぶ言語材料は重複している内容が少なくない。外国語活動で学んだ歌や詩、遊び歌やフレーズを中学校でも学習することにより、英語学習に対する抵抗感が減少し、学びの連続性を担保できると考える。小・中の教員が連携し同じ教材を扱うことにより、児童・生徒は安心感を覚え、より意欲的に学習活動に励むとともに、小学校段階では達成できなかったレベルの表現にも挑戦し、暗唱や劇の発表等に生かしている。

③教科等横断的な学び

国際理解教育において、外国の文化を知るためには、並行して自国の文化についても知る必要がある。それらを比較・関連付けることによって、それぞれのよさがより強調され、相互承認の感度が養われる。外国語教育はもとより、国語科や社会科等の学習を通して、日本の文化にも触れる機会を大切にしていく。

④主体的・対話的で深い学び

一斉学習では、電子黒板等を用いることで、「課題提示」や「見通しをもたせる活動」をより簡潔且つ効果的なものとし、展開の時間を十分確保できるようにする。ピクチャーカードやワークシートなどを学級全体で確認する必要がある活動については、書画カメラ等を活用する。

また、展開の場面においては、ワークシートや個人でまとめた成果物等を、タブレット端末や授業支援ソフト、書画カメラ等を用いてそのまま電子黒板に映し出すことにより、瞬時に共有することができる。教師も、個々の生徒の学習状況を瞬時に把握・評価できることにより、個別の支援が従来と比べ簡便に行うことができる。このようにICTを活用することは、時間のみならず空間的な移動の制約を減じることで、学びの質を高め、主体的・対話的で深い学びを行う環境づくりに適しており、本単元においても更なる充実が検討されている。

⑤過去・現在・未来の学びをつなぐ評価

中学校は、子どもたちの小学校での外国語活動の記録を引き継ぎ、その結果を基にして外国語教育の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な活動となるよう充実を図る必要がある。その上で、どのような力が身に付いたのか、どんな姿につなげていくのかを適切に把握するために、生徒の学習の姿を基にした評価規準を設定していく。

(2) 人の生かし合い

ア 学校外

英語の基礎的・基本的な知識を確実に定着させるために、放課後に行っている補充学習教室の講師の選定においても教育人材の協働を視野に入れ、同じ人材を登用している。小学校でも教わった経験のある講師が中学校でも講師を務めることにより、一人一人の生徒の課題を把握し、指導に生かしている。

イ 異校種間

小学校教員との協働により、「教科指導での英語活動」を回避するよう配慮する。小学校で取り組んでいる外国語活動の内容や教育的効果について十分な共通理解を図ることによって、小中9年間を通した「英語に親しむ活動」の系統性の理解につなげるようにしている。また、次年度の活動の方向性についても話し合い、学びのつながりを確保していく。

ウ 同校種内

教材への理解やそれに基づいた教材研究を行う際には、それまでの取組の経緯や児童・保護者・地域の実情について共有した上で、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。その上で取組の継続性についても十分話し合い、持続可能な取組になるよう、内容の見直しを行っていく。

◆◆ 人と人をつなぐために ◆◆

本校では、平成 17 年度学校運営協議会発足時から英語教育に重点を置き、毎年夏季休業日中に2泊3日を英語で過ごす English Summer School (ESS) を実施しています。すでに 10 年が過ぎました。これは当初、希望生徒対象の授業でしたが、土曜授業実施に当たり、この事業を拡大し、生徒全員が教科授業外に英語のルーツや他国の言語との共通点、コミュニケーションツールとしての役割、楽しさを理解し、英語の興味・関心を高め、英語の授業にも積極的に取り組めるような活動にしようと、「めざせ！コスモポリタン」が始まりました。上記の目的の他、様々な外国の文化・歴史を学び、国際理解・異文化理解を深め、2020 年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会を視野に入れた、これからを生きる国際人(=コスモポリタン)への基礎を身に付けるといった目的もあります。

ここで外国語を学ぶ必要性や意義を改めて確認するとき、異言語習得という側面だけで外国語教育を捉えるのではないということが分かります。重要なのは、子どもたちが各々の道を拓くためにも、これまで以上に、言語や文化の違いを超え多様な他者と共に生きる感性が必要になるということです。だからこそ、外国語教育、あるいは「グローバル教育」は、外国語能力を身に付け、国際競争の場で活躍するグローバル人材の育成のみでなく、全ての子どもに、言語や文化の違いを超える相互承認の感性を育てていく必要があると言えます。

2020 年より 10 年先を見据えた、2030 年を生きる全ての子どもに身に付けさせたい力とは何かを考えたとき、①外国語を通じて言語や文化に対する理解を深める力、②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、③情報や考えなどを理解したり伝えたりする力はもちろんのこと、これに加え、教師や学校は「多様化」に対応し、適切に課題解決ができる人材及び、言語や文化の違いを超える相互承認の感性を育てていく必要があると考えます。

この「相互承認の感性」をより一層充実したものにするため、教育活動に関わる人材を共有していく必要があります。例えば、馬橋小学校での土曜英語学習に協力してくれた外国人講師(ALT)を招聘し、生徒に指導してもらうことで親近感が増し、慣れた英語の発音を聞くことでより円滑に自己表現に結び付けることができます。外部機関の協力を得ながら、同じ外国人講師を夏季休業中の English Summer School (ESS) にも招き、継続的に生徒に対する指導を行うなど、あらゆる教育人材を適切に活用し、コスモポリタンの育成を図っています。



Teacher Interview

Nationality

What is your teacher's name?
What is your name?

Where is your teacher from?
Where are you from?

What colors are on the teacher's flag?
What does your flag look like?

How old is the teacher's country?
How old is your country?

Culture

What is a famous food from your teacher's country?
What is a famous food in ...?

What is a popular sport in your teacher's country?
What is a famous sport in ...?

What languages are spoken in your teacher's country?
What languages do you speak in ...?

Industry

What is the largest industry in your teacher's country?
What is the largest industry in ...?

What does the money look like in the teacher's country?

I 小中一貫教育 理論編

II 総合的な学び 理論編

III 総合的な学び 実践編 就学前

III 総合的な学び 実践編 小学校

III 総合的な学び 実践編 中学校

III 総合的な学び 実践編 特別支援

IV 資料編

事例 3-2 杉並区立阿佐ヶ谷中学校（・杉並第六小学校、杉並第七小学校）

総合的な学習の時間

単元名

中学校第1学年

◆◆ 地域再発見 阿佐ヶ谷はりぼてづくり ◆◆

～地域参画への意識の向上～

1 2030年を生きる子どもたちに身に付けさせたい力と教師・学校の役割

(1) 杉並区立阿佐ヶ谷中学校（・杉並第六小学校、杉並第七小学校）

阿佐ヶ谷パールセンターの七夕まつりの一環として行われているはりぼての作成・展示に、阿佐ヶ谷中学校も例年参加している。有志で行っている時期もあったが、ここ数年来は第1学年の総合的な学習の時間の中で学年全員が取り組んでいる。

生徒全員でテーマを決めてはりぼてのアイデアを出し合い、それを基に商店街の方々に設計図を作成していただく。作成は全て生徒が行うが、作成の指導、仕上げ、展示など全工程でサポートをしてくださっている。

学区である杉並第六小学校、杉並第七小学校でもはりぼてづくりを行っており、多くの生徒がはりぼてづくりに携わった経験がある中で、中学生としてただ作成するのではなく、七夕まつりの目的や願いを受け止め、自分たちが地域の主体となっていく課題意識を一人一人が深めていけるように取り組んでいる。

(2) 育成を目指す主な資質・能力

他者と協力しながら、身近な地域社会の取り組みに主体的に参画し、その発展に貢献しようとする態度を育む。

- ・地域の方々の協力の下、はりぼてづくりに取り組むことができる。
- ・はりぼてづくりを通して地域のことを理解することができる。
- ・地域の方々や仲間と協同して、主体的にはりぼてづくりに取り組むことができる。
- ・はりぼてづくりを通して、地域の一員としての自覚を高め、伝統芸能の保存に貢献することができる。

2 多様で一貫性のある総合的な学びにおける本単元の位置付け

	就学前	小学校			
		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
系統性	自分たちの身近にいる人々と触れ合う	自分たちの身近にいる人々に気づき、地域に対する愛着をもつ		地域の人々の思いや願いに気づき、地域に対する愛着を高める	
連続性	阿佐ヶ谷の地域に親しみをもつ 自分が役に立つ喜びを感じる	安全を守っている施設があったり、人々がいたりすることに気付く		地域には商店街があり、様々な人が関わって町をつくっていることに気付く	
協働	○家族・保護者			○ゲストティーチャー	○地域や商店街の方

(3) 地域再発見のもつ意味

阿佐ヶ谷中学校がはりぼてづくりを中心に地域学習に取り組もうと考えたのは、生徒の商店街への意識の低さからだった。「阿佐ヶ谷の特徴は？」と聞いても、地名の由来や文化人については挙がるものの、なかなか「パールセンター」が出てこない。もちろん知らないのではなく、子どもたちにとっては日常の一部となっており、あえて何かを考える対象ではないのだ。

「阿佐ヶ谷七夕まつり」は昭和 29 年から始まり、平成 28 年には第 63 回を迎えた。

「暑い盛りの 8 月も、商店街に大勢の人を集めることができないだろうか」ということから始まったこのまつりの大きな特徴は、アーケード街に飾られる見事な七夕飾りと巨大なはりぼてであり、例年多くの観光客が訪れる一大イベントになっている。

はりぼてづくりを通して、七夕祭りの意義や 63 年間継続してきた地域の思いを知ること、子どもたちが自分の住む町のよさを再発見してもらいたい。また、地域への愛着を深め主体的に参画する態度を育みたいというのが学校と地域との共通した願いである。



		中学校			
第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年	
地域の人々の思いや願い、町のよさや課題に気づき、地域に対する愛着を深める		地域の文化や伝統に触れる創作活動を実践し、地域の文化や伝統について主体的に発信する			系統性
はりぼてづくりを通して、阿佐ヶ谷七夕まつりについて理解を深め、自分たちも伝統文化の継承や町づくりに参加し、自分達の住む町をよりよくしようとする態度を育む		阿佐ヶ谷七夕まつりのはりぼてづくりを通して、商店街や地域の人々の思いを再発見し、身近な地域社会の取組に主体的に参画し、その発展に貢献しようとする態度を育む			連続性
○家族・保護者 ○ゲストティーチャー ○地域や商店街の方		○杉並区で働く人 ○杉並区外の方			協働

- I 小中一貫教育 理論編
- II 総合的な学び 理論編
- III 総合的な学び 実践編 就学前
- III 総合的な学び 実践編 小学校
- III 総合的な学び 実践編 中学校
- III 総合的な学び 実践編 特別支援
- IV 資料編

3 学びを通じた成長

(1) 子どもたちの活動する姿



地域の方による、はりぼてづくりの講義
皆真剣に聞いています。

大型はりぼての骨組づくり
話をよく聞いて、慎重に作業を進めます。
特別支援学級の生徒とも協力しながら作業を進めました。



色塗り作業

針金の骨組づくり、紙を貼る作業の行程を経て、ようやく色塗り作業です。班で協力して仕上げていきます。

大型は、地球をモチーフにしたキャラクター（2体）、オリジナルキャラクター・めばえちゃん（1体）、小型は葉・星・ハートをモチーフにしています。





願いごとを書きました。

「部活の大会で優勝!」「世界平和!」「お小遣いが増えますように」…?!

お礼の会

クラス委員が代表して、お世話になった地域の方々へ、お礼の手紙を読みあげました。



はりぼて搬入作業

ボランティアの生徒が、搬入作業を手伝いました。

阿佐ヶ谷パールセンターに飾られたはりぼて
「かけがえのない自然」
地域特別賞をいただきました!



(2) 子どもたちの成長

阿佐ヶ谷中学校では夏季休業日の課題として調べ学習に取り組んでいる。はりぼてに参加するようになってからパールセンター商店街について調べる生徒が増えた。どんな店が多いのか、なぜシャッター街にならないのかなど自分で課題を決め、散策するだけでなく、商店街の方にインタビューをしながら調査し発表する。

子どもたちにとっては日常の一部となっている商店街だが、その特徴や魅力を再発見し、地域課題を考えていくきっかけとなっている。

I
小中一貫教育
理論編

II
総合的な学び
理論編

III
総合的な学び
実践編
就学前

III
総合的な学び
実践編
小学校

III
総合的な学び
実践編
中学校

III
総合的な学び
実践編
特別支援

IV
資料編

4 学びのつながり、人の生かし合い

(1) 学びのつながり

ア 学校と社会をつなぐ学び（社会に開かれた教育課程）

- ・ 生徒たちの、小学校でのはりぼてづくりの経験を生かしながら、地域の方々や生徒同士の一層の関わり、地域理解を目指す。

イ 系統性・連続性を確保した学び

①指導目標・内容（事項）の【系統性】

- ・ はりぼてづくりを通して、身近な地域社会への理解を深めていくこと。
- ・ 地域の人々と関わりをもち、地域の一員としての自覚を育むとともに、社会に参画し、発展のために貢献しようとする態度を育むこと。

②学習と評価の方法の【連続性】

学習形態や発表の仕方、学び合い、問題解決の方法について連続性を確保して指導していく中で、子どもたちが他者と協働し、コミュニケーション能力を育めるようにする。

③教科等横断的な学び

【国語】活動したことから課題を決め、材料を集めながら自分の考えをまとめる。

【美術】はりぼてのデザインについて、全体と部分との関係などを考えながら創造的な構成を工夫する。

④主体的・対話的で深い学び

コミュニケーション能力の育成を目指し、生徒同士や地域の方との対話的に学習を進めていくことを大切に。その中で学習がより活性化するようにそれぞれの場面で ICT を活用していく。

○活動の記録をデジタルカメラで残し、事後活動で自分たちの取組を発信する時の資料として活用する。

○小学校代表と中学校代表の合同会議を行う際、コミュニケーションソフトを活用し、ビデオ通話を適宜利用する。

⑤過去・現在・未来の学びをつなぐ評価

(ア) よりよく問題を解決する資質や能力

地域の方々の説明や助言をよく聞き、はりぼてづくりに取り組む。

(イ) 学び方やものの考え方

オリエンテーションにおいて、阿佐ヶ谷パールセンター、七夕祭り、はりぼてづくりの歴史や意味を理解する。

(ロ) 主体的、創造的、協同的に取り組む態度

地域の方々や、仲間と協同して、はりぼてづくりに取り組む。

(ハ) 自己の生き方

オリエンテーションや、作成過程における地域の方々との交流、お礼の会を通して、地域の一員としての自覚を高める。

(2) 人の生かし合い

ア 学校外

- ・ 学校支援本部 ・ 阿佐ヶ谷パールセンター商店街組合

イ 異校種間

- ・ それぞれの学校でアイデアを出し合い、合同の作品を制作する。
- ・ 中学生が小学校に出向いて、はりぼてのつくり方の説明や活動の補助をする。

ウ 自校内

- ・ はりぼての展示作業は大仕事な上に夜行われるため、校内での協力体制が整っている。

◆◆ 小中をつなぐ“はりぼて” ◆◆

阿佐ヶ谷中学校の生徒の約8割は杉並第六小学校・杉並第七小学校出身であり、小学校在学中に「はりぼてづくり」を体験している。杉六小・杉七小とは、小・中協働の取組として、部活動や生徒会役員による中学校紹介を行うプレスクール、小・中協働の研究授業等を行っており、このはりぼてづくりについても連携を深めていきたいと考えている。

今後、小学校での経験を生かして、例えば、中学生が小学校に出向いて、はりぼての作り方の説明や活動の補助を行うなどの活動を充実させていくことで次のような効果が考えられる。

- ・中学生にとって…学びの連続性、コミュニケーション能力の向上、地域貢献
- ・自分の能力などを活かせる経験をすることで自己肯定間の向上
- ・小学生にとっては中学校生活に対する見通しをもつことができる 等

以上のことより、教科横断的なカリキュラムの作成を中心として、小・中協働を更に深めていきたいと考えている。

【指導の工夫】

(1) 地域を理解し、地域の発展に貢献しようとする態度を育くむために

はりぼてづくりに当たって、地域のことをより理解させるため、阿佐ヶ谷パールセンター商店街、七夕まつり、はりぼてづくりの歴史などについてガイダンスを行った。ガイダンスの結果、次のような感想が生徒から聞かれた。

- ・身近な地域のことだけど、知らないことが多かった。
- ・七夕まつりが歴史のある催し物だと分かり、参加させてもらえてうれしい。
- ・他の商店街と比べることで、改めて自分が暮らす地域のことが分かった。
- ・地域の人が教えに来てくれることがありがたい。

(2) 地域の方々により関わりをもつために

これまで取り組んできた「はりぼてづくり」は個人作業を中心に進めることが多かったが、今回は複数人数で作成する大型のものと個人でつくる小型のものと2種類作成することにした。そして大型のはりぼて作成を中心に、地域の方に指導に当たっていただいた。

生徒は6人で班を編成し、大型・小型の担当作成を、毎回ローテーションを組んだ。大型の作業人数を8～10名の少人数とすること、またローテーションを組むことで、どの生徒も地域の方とコミュニケーションをとりながら活動に参加することができた。

(3) より主体的な参加を求めて

前述したように、大型・小型に分けたこと、ローテーションを組んだことで、どの作品にもまんべんなく関わりをもつことができた。(従来であれば、一人一つの作品をつくるが多かったが、葉・星ハートなどのパーツも班で協力してつくった。)そのため、どの作品も大切に扱う態度、他者の得意分野や苦手分野を理解した上で、互いの能力を生かし合う態度、作品づくりに積極的に関わる態度を養うことができた。

(4) 関わり・協働の輪を広げる

生徒同士や地域の方々とのつながりのほかに、本校の特別支援学級との連携も行った。体育大会や給食交流での連携を生かし、各クラスに2～3名の生徒を配属した。得意分野を生かした活動ができるよう、教員同士の事前の打ち合わせも行った。

この取組により、生徒の相互理解が深まった他、自他の得意・不得意分野を知ることを含めて、他者の存在を認め、多様な関係を結ぶ力が身に付いた様子であった。

事例3-3 杉並区立神明中学校（・高井戸第四小学校）

特別活動

単元名

中学校全学年

◆◇ 神明中平和サミット ◇◆

～よりよい学校生活にするために自分でできることを考えて実践する～

1 2030年を生きる子どもたちに身に付けさせたい力と教師・学校の役割

(1) 杉並区立神明学校（・高井戸第四小学校）

本校では、学校行事や生徒会・委員会活動の充実を通して、自主・自律の精神を育成することを目標の一つに掲げている。本事例の「神明中平和サミット」は、これまで杉並区立中学校の生徒会役員が一堂に会し、他校の生徒や教員、地域、保護者といじめ撲滅の取組を行ってきた「中学生サミット」に由来する。本事例が行われた年度は、「すぎなみ小・中学生未来サミット」と名称を変え、これまでの中学生サミットから発展させ、小学生との連携を図った取組となった。

本事例は、本校一人ひとりの生徒がこれまでの自校で取り組んできた「いじめ防止対策」を見つめ直し、「すぎなみ小・中学生未来サミット」の場で、学校生活をよりよくするためにどうしたらよいのか、全生徒で考えたことを基に、本校の代表（生徒会役員）が協議することもねらいの一つにある。

さらに、小学校との連携を深め、地域がよりよくなることも期待している。

(2) 育成を目指す主な資質・能力

本校の学校生活に関する意識・実態は、右表平成28年度杉並区「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」の結果から、「学校の生活が充実している」と感じている生徒が多いことが分かる。さらに、「学校での生活は、自分が協力することで、自分にとってもみんなにとってもよりよいものにできると思う」と全体の生徒の9割近くが回答している。また、「自分は、努力すれば、いろいろな人とよい人間関係をつくっていけると思う」と、前向きに自己評価のできる生徒が育っていることが分かる。

これは、本校がこれまで生徒会組織を活性化させ、いじめ防止活動に継続して取り組み、主体的に自らの生活や学習環境を向上させる意識を育んできた成果と言える。

2 多様で一貫性のある総合的な学びにおける本単元の位置付け

	就学前	小学校			
		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
系統性	社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。	異年齢の児童同士で協力し、学校生活の充実と向上を図るための諸問題の解決に向けて、計ことに自主的・実践的に取り組む。			
連続性	身近な環境に自ら関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れる。	①約束やきまりを守る。 _____ ②課題を見いだす。 _____ ③提案・協議する。 _____ ④実践する。 _____			
協働	幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同研究の機会を設けたりする。	<ul style="list-style-type: none"> 年間指導計画上の学習の到達目標を共有し、学級や学年の担当間で共通理解を図る。 代表委員会、生徒会担当が中心となり、互いの学校の進捗状況や内容を十分に理解し合い 家庭や地域など実生活や実社会との関連を一層深め、家庭や地域の人々との連携、社会教 			



- I 小中一貫教育
理論編
- II 総合的な学び
理論編
- III 総合的な学び
実践編
就学前
- III 総合的な学び
実践編
小学校
- III 総合的な学び
実践編
中学校
- IV 資料編

	第1学年	第2学年	第3学年
学校生活の充実度			
学校の生活が充実している。	91.4%	75.6%	82.4%
学校での生活は、自分たちが協力することで、自分にとってもみんなにとってもよりよいものにできると思う。	87.7%	81.6%	92.3%
情報を収集し、活用する能力			
調べたことを基に、自分の意見や考えをまとめることができる。	72.8%	71.3%	80.0%
自分の意見や考えを相手に分かりやすく伝えることができる。	55.0%	57.5%	52.7%
道徳的実践力			
決まりを破ったり、いじめをしたりしている友達がいたら、自分から進んで注意している。	60.0%	43.0%	58.4%
自分は、努力すれば、いろいろな人とよい人間関係をつくっていくことができると思う。	87.7%	81.6%	87.9%

平成 28 年度杉並区「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」の結果より

グローバル化が進む今日の世界の中でも生き抜けるよう、自分自身で物事を判断する力を持ち、自主的に学び、向上心をもって成長する力を身に付けさせたい。そのためにも、他者とコミュニケーションを取ることが大切にし、考えを伝え合える力を育みたい。

		中学校			
第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年	
画を立て役割を分担し、協力して運営する		異年齢の児童同士で協力し、学校生活の充実と向上を図るための諸問題の解決に向けて、計画を立て役割を分担し、協力して運営することに自主的・実践的に取り組む。			系統性
		平和サミット			連続性
		→			
		→			
		→			
取り組む。 育施設等を活用する。					協働

3 学びを通じた成長

(1) 子どもたちの活動する姿

○神明中平和サミット

1次

○実施計画を検討し、提案する。

2次

○いじめ対策案のアイデアを出してもらおう。

【学級】

- クラスごとにいじめ対策案について話し合う。
- *クラスでの話合いの前に、全学年「道徳」でいじめをテーマにした授業を実施する。
- *全学級共通の話合いのためのワークシート「平和サミット事前ワークシート」を用いる。(生徒会作成)

【学年】

クラスから上がった案を学級委員会でまとめる。

【代表者会議】

各学年の案の有効性や実現性について、生徒評議会（委員長などの代表者会議）で討論し、案を絞る。

平和サミット事前ワークシート

年 級 名 _____

① 議のアンケートを参考にワークシートを進めてください。平和サミットは神明中独自の取り組みです。積極的に意見を出す等、ご協力をお願いします。

② 議のアンケートを見てあなたが思ったことを書きましょう。

③ 現在、生徒会の意見簿に先生や生徒に向けての刺し言葉や、人を傷つけるようなことを書く人がいます。いじめ・刺し言葉に関して現在の神明中の欠点・課題と思うことを書きましょう。

④ ②③をかまえてあなたが思う、一人ひとりが出来る「いじめ・刺し言葉防止策」は何かとありますか？

⑤ ④で出した意見をもとにクラスで話し合っ、クラスの「いじめ・刺し言葉防止策」を決定しましょう。

年 級 名 _____

⑥ ⑤で出した意見を班で話し合っ、一つにまとめましょう。

ご協力ありがとうございます。

3次

《平和サミット》司会進行、記録：生徒会役員

○全校で取り組むいじめ対策案を決定する。

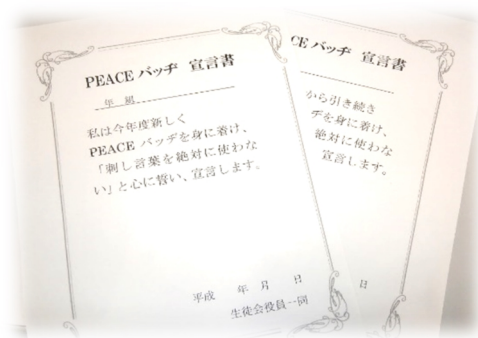
- ・生徒評議会から提案された案について、縦割り班で話し合う。
- *縦割り班は各学年3～4人、一班10人前後で構成する。
- ・話合い後、全体で意見を交流する。
- *意見のある者はプラカードを掲げる。
- ・最後に採決を取り、いじめ対策案を決定する。

議題

個人のできるいじめ・刺し言葉防止策

提案

①「PEACE バッジ 宣言書」を書く。



・月1回、「PEACE バッジ 宣言書」を書く。

↓
PEACE バッジを付ける意味を改めて考える機会にする。

「刺し言葉は使わない」という意志を強くもつことができる。

②MVPの発表

- ・日直が選ぶ MVP
- 日直がその日の MVP を 1 人終学活で選ぶ。

MVP に選ばれた人は、クラス全体全体から認められ、自己肯定感を高めることができる。

③寸劇の実施

- ・テーマ：いじめや刺し言葉
- ・出演者：学級委員、専門委員長、生徒会役員
- ・時間：2 分間程度
- ・頻度：月に 1 回、全校朝会時

寸劇を通して、いじめや刺し言葉について考えることができる。

④刺し言葉防止 WEEK

- ・終学活でその日行いがよかった人等を発表
- ・各専門委員が普段行っているいじめ対策の活動を「刺し言葉 WEEK」中に実施
- ・クラス全員で休み時間に遊ぶ など

決定

寸劇

* 9 月の全校朝会にて、生徒会役員が実施した。

(2) 子どもたちの成長

事前に、道徳でいじめをテーマにした授業を行ったり、学級活動でいじめの現状や以下の前年度生徒会が実施した「神明中のいじめに関するアンケート」の結果を参考にしたりして、「平和サミット事前ワークシート」に取り組んだ。このことは、生徒自身が自主的に考えることで、実行への強い意識付けになった。

項目	第2学年	第3学年
①あなたはいじめのきっかけが何だと思いますか。		
1 刺し言葉	23.5%	28.0%
2 暴力	6.2%	12.2%
3 どちらも	59.2%	48.7%
4 その他	11.1%	10.1%
②刺し言葉を減らすために PEACE バッジは役に立っていると思いますか。(複数回答あり)		
1 はい	47.0%	38.4%
<その理由> (第2・3学年共通) 自分で意識できるようになる 全員の意識が変わった 実際に減った 周りの人が注意しやすくなる		
2 いいえ	44.6%	61.6%
<その理由> (第2・3学年共通) 付けていても言っている人がいる 注意できていない ただ付けている (第2学年) 刺し言葉が減っていない 付けていない人が言ってもいいと勘違いする (第3学年) 気付かないところで言っている		
3 無回答	8.4%	0%

当日の平和サミットでは、第3学年の発言が多くなったが、第1・2学年の生徒も積極的に発言し、挙手の絶えない活発なものとなった。終了後のアンケートでは、「話合いの時間が足りなかった」「もっと発言したかったのに指名されなかった」といった声が多く挙がり、生徒の関心・意欲の高さがうかがえた。

また、今年度行われた「すぎなみ小・中学生未来サミット」では、本校代表の生徒たち(生徒会役員)が平和サミットでの活動を基に、自分たちの考えを発信することができた。

(3) 高井戸第四小学校との交流

ア いじめに関する話し合い

毎年、高井戸第四小学校への訪問を行っている。2年前の訪問時、小学校から、「いじめに対する取組について考える機会を設けてほしい」という要望があった。当時の生徒会が話し合い活動を行ったことを受け、今回は、各クラスへ生徒会役員が訪問し、小学生の班ごとの話し合いに加わり、神明中平和サミットでの話し合いの内容を小学生へつなげた。

○いじめ対策案について、小学生と意見を交流する。

- ・小学校と中学校の取組について、お互いを知る。
 - ・いじめをなくすための取組としてできることはないか考える。
 - *生徒会役員が班での話し合いが活発になるよう、資料を提示するなどしてリードをする。
- 生徒会では、「神明中平和サミット」に小学生も交えて話し合える環境づくりを検討している。

4 学びのつながり、人の生かし合い

(1) 学びのつながり

ア 学校と社会をつなぐ学び（社会に開かれた教育課程）

集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を養う。また、健全な生活態度を育成する活動を効果的に展開するために、家庭での指導との連携を図り、地域の人材を活用したりすることが大切である。

イ 系統性・連続性を確保した学び

①指導目標・内容（事項）の【系統性】

生徒は、小学校6年間で発達段階に応じて自発的、自治的な活動を積み重ねることにより、よりよい人間関係を築く態度を学び、学級における所属感を一層深め、中学校へ入学してくる。学級や学校での生活の充実と向上をさらに図るためには、そこで生じる人間関係や生活上の様々な問題について、生徒一人ひとりが学級や学校の一員としての自覚と責任感に基づき、協力して解決していこうとする自主的、実践的な活動を進めていく必要がある。そのためには、学年に応じた指導をしっかりと行い、以下の表のように、学級活動の評価規準を設定し、学びのつながりを明確にしていく必要がある。

	小学校		
	第1・2学年	第3・4学年	第5・6学年
集団活動や生活への関心・意欲・態度	学級の身の回りの問題に関心をもち、他の児童と協力して進んで集団活動に取り組もうとしている。	学級の生活上の問題をもち、他の児童と協力して意欲的に集団活動に取り組もうとしている。	学級や学校の生活の充実と向上に関わる問題に関心をもち、他の児童と協力して自主的に集団活動に取り組もうとしている。
集団の一員としての思考・判断・実践	学級生活を楽しくするために話し合い、自己の役割や集団としてのよりよい方法などについて考え、判断し、仲良く助け合って実践している。	楽しい学級生活をつくるために話し合い、自己の役割や集団としてのよりよい方法などについて考え、判断し、協力し合って実践している。	楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるために話し合い、自己の役割や責任、集団としてのよりよい方法などについて考え、判断し、信頼し支え合って実践している。
集団活動や生活についての知識・理解	みんなで学級生活を楽しくすることの大切さや、学級集団としての意見をまとめる話し合い活動の基本的な進め方などについて理解する。	みんなで楽しい学級生活をつくること大切さや、学級集団としての意見をまとめる話し合い活動の計画的な進め方などについて理解している。	みんなで楽しく豊かな学級や学校の生活をつくることの意味や、学級集団としての意見をまとめる話し合い活動の効率的な進め方などについて理解している。

	中学校
集団活動や生活への関心・意欲・態度	学級や学校の生活の充実と向上に関わる問題に関心をもち、他の生徒と協力して、自主的、自立的に集団活動に取り組もうとしている。
集団の一員としての思考・判断・実践	学級や学校の一員としての自己の役割と責任を自覚し、生徒の意見を尊重しながら、集団におけるよりよい生活づくりなどについて考え、判断し、信頼し支え合って実践している。
集団活動や生活についての知識・理解	充実した集団生活を築くことの意義や、学級や学校の生活づくりへの参画の仕方、学級集団として意見をまとめる話し合い活動の仕方などについて理解している。

②学習と評価の方法【連続性】

「すぎなみ小・中学生未来サミット」への参加を踏まえ、内容の理解に基づいた指導の連続性を確保する必要がある。例えば、プレゼンテーションを作成する際については、①課題発見、②課題共有、③課題解決に向けてのグループでの話し合い活動、④グループでの話し合い活動の結果を一斉の場で共有する、⑤他のグループからの指摘やアドバイスを反映し、グループの意見をまとめる、といった学習の構成について、小中で共通理解を図ることが連続性の確保につながる。

③教科等横断的な学び

- ・国語科・社会科等

特別活動における集団活動においては、話し合い活動、言語等による表現や発表などが重要である。また、活動の企画・立案を行ったり、調査を行ったりすることもある。こうした活動の基盤となる能力は、国語科や社会科をはじめ各教科の学習を通して培われる。

- ・道徳

特別活動における学級や学校生活における集団活動や体験的な活動は、日常生活における道徳的实践をする重要な場である。

④主体的・対話的で深い学び

平和サミットでは、プレゼンテーションソフトを利用した提案や発言内容のキーワードの記録の提示等でタブレット端末を活用した。

今後、小・中合同の平和サミットの開催に向け、小学校代表委員と中学校生徒会役員の合同会議を行う際、コミュニケーションソフトを活用したテレビ会議を行うことも考えられる。これは、安全への配慮や時間の確保が可能になり、必要なときに打ち合わせを行いやすくなり、短時間での打ち合わせを重ねることで、より共通理解を図ることが期待できる。

⑤過去・現在・未来の学びをつなぐ評価

ポートフォリオ評価やパフォーマンス評価などの評価方法を発達段階や学習内容に合わせて効果的に行い、指導に生かすことができるようにする。

(2) 人の生かし合い

ア 学校外

外部指導員を積極的に活用し、より専門性の高い学びの機会につなげている。生徒の思考の幅が広がったり、意欲が向上したりしている。

イ 異校種間

具体的な取組内容の目的や必要性などを代表委員会、生徒会担当が中心となり、互いの学校で共有することで、進捗状況や内容を十分に理解し合い、取り組むようにする。

ウ 同校種内

「すぎなみ小・中学生未来サミット」等の機を捉え、生徒会担当が中心となり、区内全中学校がよりよい学校生活を送れるよう、共通理解を図り指導に当たるようにする。

◆◆ すぎなみ小・中学生未来サミット ◆◆

平成 28 年 7 月 30 日（土）セッション杉並にて、「すぎなみ小・中学生未来サミット」が開催されました。みなさんは、このサミットの開催の経緯を御存知でしょうか。

【主な経緯】

○平成 25 年 1 月

区立中学校生徒会から、全校規模でいじめ追放を目指した「中学生サミット」実施の必要性の提案

○平成 25 年 2 月

区立中学校生徒会担当が杉並教育研究会中学校部会特別活動部へ提案

杉並教育研究会特別活動部より中学校長へ提案

区内中学校長と実施案の策定

準備委員会（生徒会代表、校長会代表、事務局）の設置及び実施

○平成 25 年 8 月 4 日（日）セッション杉並 「杉並中学生生徒会サミット」開催

目的

- ・志のある中学生が企画・提案した「区立学校からいじめをなくすこと」を目的とする区立中学校生徒会役員が一堂に会する協議会（サミット）を開催し、今後、小・中学校でいじめをなくす運動を展開する。
- ・本会で協議した取組等については、中学校生徒会役員により、本校はもとより小中一貫教育を進める小学校にもつなげ、小・中学校でのいじめをなくす活動に広げていく。
- ・さらに、広く区民、教員等が会していじめ問題を考えることを目的とした「教育シンポジウム」を開催し、社会全体で「夢に向かい、志をもって、自らの道を拓く人」「かかわり」を大切にし、地域・社会・自然と共に生きる人』を目指す子どもたちを育てる気持ちを醸成する。

参加生徒

各中学校生徒会役員

内容

第 1 部

各学校のいじめをなくす取組について（発表）

第 2 部

『いじめってなんだろう？』『いじめをなくすために！』（意見交換）

○平成 26 年 7 月 26 日（土）杉並区勤労福祉会館

内容

第 1 部

各学校のいじめをなくす取組
「されてうれしい行動（しぐさ）」（発表）

第 2 部

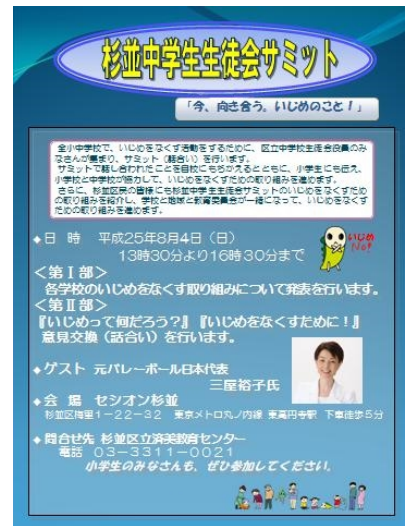
「僕たち 私たちにできる解決策」（意見交換）

○平成 27 年 8 月 1 日（土）セッション杉並

参加生徒

各中学校生徒会役員

*全校から各 1 名、パネラーとして登壇



内 容

- 第1部
「具体例から考えてみよう」(意見交換)
- 第2部
「自分たちでできること」(意見交換)

行動目標『「目を見て話す」「直接話す」「行動に移す」ことを意識していこう』

○平成 28 年 7 月 30 日 (土) セシオン杉並 * 「すぎなみ小・中学生未来サミット」へ名称変更

目 的

- ・区立中学校生徒会役員が一堂に会する協議会(サミット)を実施し、今後、小・中学生が学校生活をよりよくする活動を展開するために必要な方策等を協議する。
- ・本会で得た成果等を中学校生徒会役員が中心となって、小中一貫教育を進める小学生に伝え、連携しながら学校生活をよりよくするための取組を推進する。
- ・広く区民に対して、中学校生徒会の取組を紹介し、学校・地域・行政が子どもの様子に対する共通認識を深め、子どもたちがよりよく育つ環境の整備に寄与する。



参加生徒・児童

各小学校代表児童及び各中学校生徒会役員

内 容

- ポスターセッション：小中連携校における取組(発表)
- 第1部
「各小中連携校の1年間の取組」(発表)
- 第2部
「明るい学校づくり」(意見交換)

杉並第四小学校・杉並第八小学校・高円寺中学校の取組

「小・中学生未来サミット」では、小学生も参加しています。

平成 28 年度、司会担当校であった高円寺中学校と連携している杉並第四小学校と杉並第八小学校からも代表児童がパネルディスカッション(第2部)に登壇しました。

当日を迎えるに当たり、サミットの1か月前に、今回登壇した児童と生徒会役員は、事前討論会を行いました。

事前討論会では「自分の学校自慢」など、自己紹介を交えながら、サミットのテーマ「明るい学校づくり」に結び付く内容で意見交流をしました。

もともと、小・中の協働が積極的に行われている3校のため、交流はスムーズに進み、そして、事前討論会によって、児童に安心感を与えることができました。

当日は、大きな会場、たくさんの人、様々な年齢・立場の人がいる中、堂々と自分の考えや思いを発言していました。

また、生徒会の役員は、児童との関わり方はもちろんのこと、発問の仕方や考えを導く助言等を意識した進行を行うなど、見事に大役を果たしました。



- I 小中一貫教育理論編
- II 総合的な学び理論編
- III 総合的な学び実践編 就学前
- III 総合的な学び実践編 小学校
- III 総合的な学び実践編 中学校
- III 総合的な学び実践編 特別支援
- IV 資料編

事例 4-1 杉並区立済美養護学校（・副籍校）

図工・音楽・総合的な学習の時間

単元名

小学部 中学部

◆◇ 地域で学び 地域で育つ ◇◇

～共生社会を目指して～

1 2030年を生きる子どもたちに身に付けさせたい力と教師・学校の役割

(1) 杉並区立済美養護学校（・副籍校）

杉並区立済美養護学校は区内唯一の特別支援学校として、一人ひとりの発達に合わせ、知的障害のある児童・生徒の自立と社会参加につながる力を育てている。児童・生徒は、区内全域からスクールバスを利用して通学している。昭和26年（1950年）杉並区立大宮中学校と同済美小学校の特殊学級として設立され、「済美学園」と呼ばれていた。当時から将来の就労を見通した9年間の学びを充実させている。

校舎の傍を流れる善福寺川には、シラサギやカルガモ等、様々な種類の鳥たちがその恵みを求めてやってくる。春には桜の花びらが川面に浮かび、生まれたばかりのカルガモの雛鳥たちが、母鳥の後をひたむきに追う微笑ましい姿を見ることができる。

本単元は、季節に合わせた地域交流単元「こいのぼり集会」と、児童・生徒が地域指定校と交流する「副籍交流活動」を内包したものである。5月、校舎脇を麗らかに流れる善福寺川には、約60匹の鯉のぼりが優雅に空を泳ぐ。地域自慢の情景を楽しむことで、地域への親しみをもつ。また済美養護学校で学ぶ児童・生徒の生活する地域に設定された地域指定校での副籍交流では、地域指定校の児童・生徒と相互に関わり心豊かに成長することで、共生社会の担い手を育てることにつながる単元である。

(2) 育成を目指す資質・能力

【小学校・中学校 共通の育みたい力】

地域の一員であるという自覚

- ・お互いに関わり合うことのよさを感じる力

これからの人生を前向きに考える力

- ・関わりの中で自分の役割を理解し、活動に参加する力

2 多様で一貫性のある総合的な学びにおける本単元の位置付け

	就学前	小学校			
		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
系統性	・地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付く。	【体験する】地域の季節行事を体験する。 【関わる】仲間と共に地域行事や地域指定校の活動に参加する。			
連続性	・様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">鯉のぼり集会</div> ①地域の季節行事に親しむ			
	・友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">副籍交流</div> ③生活する地域の人に親しむ			
協働		・年間指導計画を基に、児童・生徒の発達段階に即して鯉のぼり集会を開催し、地域の方や地域指定校の学級担任等と連携し、対象児童・生徒本人と副籍学級児童・生徒双方の学ぶ			

(3) その他

①善福寺川での「鯉のぼりの川渡し」

杉並区堀ノ内1・2丁目町会で「鯉のぼり実行委員会」を組織し、平成11年から実施している。近隣地域の鯉のぼりをリユースし60匹以上が悠然と皐月の空を泳ぐ。本校屋上から対岸の済美教育センターまでに装飾され、熊野橋から紅葉橋までの眺めは、地域の風物詩であり伝統行事となっている。

②様々な交流学习の形態

「副籍制度」は、「特別支援学校の小・中学部に在籍する児童・生徒が、居住する地域の区市町村立小・中学校（地域指定校）に副次的な籍（副籍）をもち、直接的な交流や間接的な交流を通して、居住する地域とのつながりの維持・持続を図る制度」のことである。（東京都教育委員会『副籍ガイドブック』抜粋）

平成19年度より、東京都教育委員会主体で制度が始まり、当初は希望者のみが副籍をもつ取組だったが、平成27年度の新入生からは全員が「地域指定校」（居住区の学区の学校）に副次的な籍を置くことになっている。杉並区でも対象の児童・生徒が全て一人ひとりの子どもに応じた形態で交流を行っている。



		中学校			
第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年	
		【体験する】 既存の経験を生かし見通しをもって参加する。 【関わる】 お互いの役割ごとに近隣校の生徒と協力して活動する。			系統性
		鯉のぼり集会			
		②近隣校の児童・生徒と協働して自作の鯉のぼりを作成する			
		副籍交流			
近隣校の児童生徒を招く。 機会を設定する。					

- I 小中一貫教育 理論編
- II 総合的な学び 理論編
- III 総合的な学び 実践編 就学前
- III 総合的な学び 実践編 小学校
- III 総合的な学び 実践編 中学校
- III 総合的な学び 実践編 特別支援
- IV 資料編

3 学びを通じた成長

(1) 子どもたちの活動する姿

ア 鯉のぼり集会

小学部の鯉のぼり集会では、第1～6学年が寄付された鯉のぼりの実物を見て、実際に触れたり、みんなで協力して持ち寄りその大きさを実感したりする。堀之内1丁目・2丁目町会の方々を集会にお招きして、地域の中で健やかに成長していくことができるようにお話をさせていただく。済美小学校かしのみ学級の児童と共に、その鯉のぼりを広げて持ち、大空を泳ぐ姿を想像し、地域行事を楽しみにすることができる。

中学部の鯉のぼり集会は、鯉のぼりの由来など、関連するお話を聞いたり、視聴覚機器を活用したりして鯉のぼりについて学習する。これまでの鯉のぼり集会についての生徒の体験について振り返るなど、生徒同士や生徒と教員のやりとりを中心に構成される。集会のフィナーレを飾るのは、実物の鯉のぼりを用いた「鯉のぼりレース」。実物の鯉のぼりが青空を雄大に泳ぐ姿を想起しながら、体育館でリレーを行う。集会の際に、大宮中学校C組の生徒と共に作成したオリジナル鯉のぼりは、その鱗に生徒一人一人の願いが記され、済美養護学校の壁面掲示物として1年間校内を泳ぎ続ける。



イ 副籍交流

副籍交流には、直接交流と間接交流がある。全ての児童・生徒にとって、交流クラスの授業や行事に参加して交流を深める直接交流をするべきかと言えば必ずしもそうではない。中には、直接交流をしないという選択肢も有り得る。児童・生徒や保護者にとって、無理を強いることになったり、過度な負担になったりするようであれば、せっかくの交流活動もその効果を発揮することが難しくなる。児童・生徒や各家庭に合った方法で、一人一人に合った交流の仕方を模索するには、児童・生徒本人や保護者の思いや実態に即して一歩ずつ進むことが望ましい。例えば、間接交流で「学校便り」や「行事の案内」等のお便り交換を中心に交流することで、確実にお互いの存在を伝え合うことができる場合も考えられる。

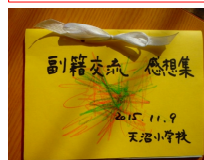
交流の頻度は学期に1回（年間3回）程度が最も多い。交流の回数が多い児童・生徒は土曜授業等に積極的に参加している例もみられる。さらに、毎月、定期的に給食交流をしている児童・生徒もいる。

今後は、災害時に備え地域指定校で実施している震災救援所の訓練などへの参加も見込まれている。



小5 Gさん
G小学校 土曜授業
「茶道」「ICTを使った交流」等

交流のあと、感想文が届きました。



(2) 子どもたちの成長

展覧会等の学校行事にも、同じ学区域に在住の児童・生徒の作品を展示する等、副籍交流は次の交流を生み出していくことも多い。

児童・生徒が地域の児童館や図書館、地域行事等でお互いの顔を合わせることも想定される。居住地交流は自然なことという意識こそが、共生社会への確実な一歩となっていく。



副籍交流で地域指定校を訪問したとき、交流学級のみんなが、お楽しみ会を企画してくれたよ。ドキドキしていたけれど、イス取りゲームを一緒にやってみて、楽しむことができました。



済美養護学校中学部の「鯉のぼり集会」。大宮中学校C組の生徒と一緒に、鯉のぼりについて調べたことを発表しました。マイクで上手く話せるか緊張しました。鯉のぼりの歌も一緒に歌いました。



地域指定校に給食交流に行きました。一緒に美味しい給食を食べた後、交流学級の皆さんがゲームを一緒にやろうと提案してくれました。ゲームのルールを教えてもらい、一緒に楽しんでみると、周りで見っていた中学生も声を掛けてくれました。

上記のような交流を積み重ねたことで、副籍交流を行った児童・生徒同士が地域ですれ違った際、お互いのことを認識して挨拶を交わす場面も生まれている。以下に保護者の副籍交流後の感想を記す。

[保護者の感想より]

・小学部1年 Oさん

副籍校の1年1組に2か月に1回ほど交流しました。交流会と帰りの会に参加しています。

交流会は歓迎会や息子の誕生会やゲーム大会等、学級のお友達が先生と一緒に準備してくれました。

おたより交換をしたり、歌やピアノ演奏をプレゼントしてくれたり、みんなでハンカチ落としや図工でつくったどんぐりゲームで遊んだりしました。息子は内容を理解できていないところもありますが、本人のペースで楽しそうに参加しています。お友達も時々息子の突飛な行動にびっくりしながらも学級の一員として迎えてくれています。みんな楽しそうで、交流に参加できてよかったですと思いました。

・中学部2年 Kさん

地元にお友達がいないので、顔見知りができればと思い、交流を希望しました。実際に取り組んだ交流のプログラムは、給食交流、文化祭での作品展示、茶道部体験、合唱コンクール見学、地域清掃です。副籍校のお友達も、多感な年頃のですし、給食の時間が短いこともあり、積極的に関わってくれるお友達は少ないです。でも、温かく受け入れてくれ、先生方も可愛がってくださるので、本人は楽しそうです。ここに在籍していると実感することもでき、充分収穫はあったと思っています。

4 学びのつながり、人の生かし合い

(1) 学びのつながり

ア 学校と社会をつなぐ学び（社会に開かれた教育課程）

〔鯉のぼり集会〕

- ・ 地域の方々や他校の児童・生徒との交流を深め、家族等と地域行事を共に楽しむ。

〔副籍交流〕

- ・ 災害時等の対応を見据え、居住地域とのつながりを育む。
- ・ 副籍制度で知り合った友達と、挨拶をしたり、遊びに誘ったりするなど、日常的な関わりをもつ。

イ 系統性・連続性を確保した学び

〔鯉のぼり集会〕

小学部では体験的で地域の方々との関わりがある集会活動を行い、地域行事に親しみ参加する体験を積み重ねる。中学部では、鯉のぼりについての理解を広げ、これまでの体験を基に交流学級（知的障害特別支援学級）の中学生と協働し、みんなの願いを込めて自作の鯉のぼりを製作する。

ウ 教科等横断的な学び

- ・ 副籍交流を行う地域指定校の学級における「総合的な学習の時間」（例：伝統的な学習の時間）や図工、音楽、特別活動等の学びの場面を設定する。

エ 過去・現在・未来の学びつなぐ評価

- ・ 自分も周囲の人もどちらも大切に考えることができる。
- ・ 地域指定校の活動や地域社会の活動に参加しようとする。
- ・ 人との関わりの中で自分の役割や居場所を知ることができる。

また、保護者のアンケートによれば、直接交流を選んだ理由として回答が多かったのは次の4点である。

- ・ 地域の子どもたちに我が子を知ってほしい。
- ・ 我が子に通常の学級で学ぶ子どもと接する機会を作りたい。
- ・ 災害等に備え、地域の方に我が子の存在を知っておいてほしい。
- ・ 保育園や学童クラブで一緒に過ごしてきた友達が交流学級に在籍している。

一方、間接交流を選んだ理由には次のような回答が見られた。

- ・ 高学年になるにつれて、直接交流が難しくなった。
- ・ 直接交流を将来的にはしていきたいが、その前の段階として選んだ。

(2) 人の生かし合い

ア 学校外

〔鯉のぼり集会〕

- ・ 地域で不要になった鯉のぼりを堀之内1・2丁目町会が中心となって集める。
- ・ 町会の代表が集会に参加し、子どもたちの成長を願ってメッセージを送る。

〔副籍交流〕

- ・ 対象児童・生徒の保護者が付き添い、交流活動を見守る（一緒に参加することもある）。
- ・ 地域指定校の学校行事や地域行事等に参加し、近隣の方々と触れ合う。

イ 異校種間

〔副籍交流〕

小学部は地域指定校の小学校との副籍交流、中学部は地域指定校の中学校との副籍交流を実施。



ウ 同校種内

〔鯉のぼり集会〕

済美養護学校の近隣校である済美小学校「かしのみ学級」の児童、及び大宮中学校C組の生徒が集会に参加する。

〔副籍交流〕

- ・ 事前に地域指定校の特別支援教育コーディネーターや学級担任と調整し、特別支援学校コーディネーターが「特別の教科 道徳」や学年集会等で障害の理解に係わる出前授業を実施する。
- ・ 出前授業の内容は、設定時間や該当学年の理解に合わせて、「特別支援学校」、「副籍交流」、「障害について」等を実施している。プレゼンテーションソフトを活用しての説明や、疑似体験を取り入れる等の工夫をしている。副籍交流をしていない学校でも、要望があれば出前授業に行く。
- ・ 本人、保護者とコーディネーターまたは担任が同行し、交流するクラスまたは学年に挨拶に行く。
- ・ 朝の会や学年集会等で、本人、保護者が挨拶や自己紹介等する。
- ・ 本校コーディネーターまたは担任から、済美養護学校の紹介や副籍交流等について説明する。
※間接交流でも保護者の希望があれば実施している。

I
小中一貫教育
理論編

II
総合的な学び
理論編

III
総合的な学び
実践編
就学前

III
総合的な学び
実践編
小学校

III
総合的な学び
実践編
中学校

III
総合的な学び
実践編
特別支援

IV
資料編

◆◆ 副籍交流活動を通して ◆◆

【積み重ねが強い結び付きに】

交流及び共同学習を進めていると、保護者の声を傾聴することが思いを受け止めていくことにつながるのだと実感します。「副籍交流ってなんだろう。」という誰もがもつ素朴な疑問に丁寧に答えていくことが理解の深まりにつながることから、「副籍について知りたいこと」というテーマで保護者へアンケート調査を実施しました。これまで、本当にたくさんの回答を頂戴してきましたが、その中からお答えした内容を一つ紹介します。

「交流先の地域指定校によって、副籍制度に対する認知度は異なると思います。保護者の理解を深めるために取り組んでいることがあれば教えてください。」

居住地の学校との交流は、特別支援学校の児童・生徒の居住地分布が均等ではないため、学校によって受け入れ経験や年数が異なります。

今年で10年目を迎える副籍制度（済美養護学校では8年目）ですが、早い時期から実践を積み重ねてきたこともあり、内容に関しては過去の実践を生かして交流計画の作成に役立てています。

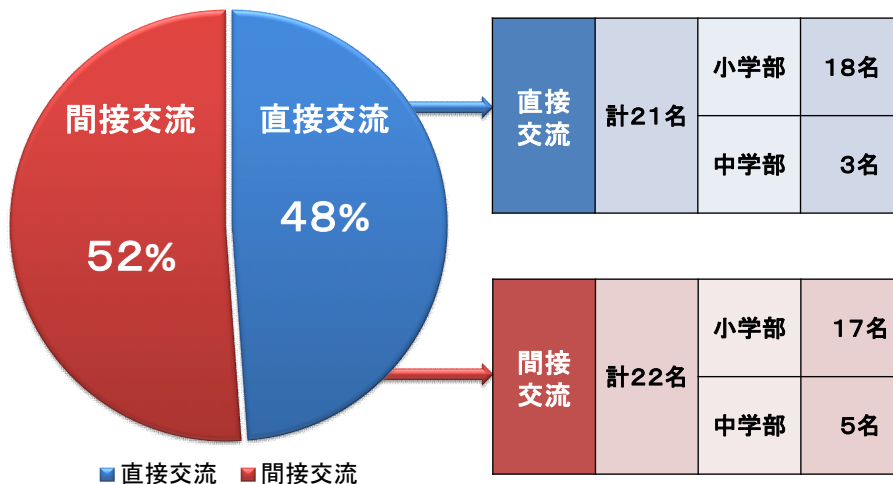
現時点では児童・生徒の直接的な関わりをつくることを重点的に取り組んでいます。地域の方や保護者への理解啓発という点では、交流学級の学級通信で活動の様子を伝えていただいたり、「〇〇さん特集」という記事を掲載して下さったりした学級もあります。

また、特別支援教育コーディネーターが「出前授業」という形で障害理解の授業をしに交流学級へ出向くこともあります。間接的ではありますが、子どもたちへの働き掛けが家庭に届き、保護者へも伝わることを願って授業をしています。

継続的にこうした取組を積み重ね、更に改善するためには、副籍事業を主催する杉並区に事例について知ってもらい、制度設計をより良いものにするためにバックアップしてもらうことが望まれます。各学校には「特別支援教育コーディネーター」が配置されていますので、まずは32校ある地域指定校での副籍交流をリードしてくれる先生方との連携・協働を図っていきます。

交流内容

副籍交流実施43名中 直接交流21名 間接交流22名



【保護者の声】

〔小学部 第2学年 Kさん〕

月1回の土曜授業で図工に参加しました。

テーマは「おしゃれな洋服づくり」。カラーの袋を洋服に見立てて画用紙やビニールテープを使用して作りました。息子は学校で用意してもらった画用紙にシールを貼り、大好きな時計を完成させました。周囲を見渡しながらかんがえながら課題に取り組むことができ、完成作品を隣のお友達に見せたりしていました。周りのお友達も時折声を掛けてくれ、進み具合を確認してくれました。

普段から学童や学校の行き帰りに声を掛け挨拶をしてくれるので抵抗なく参加できていることに感謝しています。また、今回は同時に副籍校でも作品展が行われており、息子もテーマに沿った作品を本校で作って出展しました。今後も楽しみながら交流に参加したいです。

〔小学部 第4学年 Mさん〕

小学校1年時から、1、2か月に1回程度給食交流を主体とした直接交流を続けています。副籍校交流に期待することは、地域に「こんな子がいるよ、怖くないよ。」と認識してもらうこと。上手にコミュニケーションが取れなくても自然体で過ごせばOKというスタンスで臨んでいます。しかし、思いがけず毎回歓迎され、娘もすっかり副籍校に馴染んでいます。

交流を積み重ねてきたことで、副籍校の子どもたちが娘の存在に慣れ、親近感をもって接してくれるようになったことが何より大きな収穫です。朝の通学路や、休日に外を親子で歩いている時など日常的に声を掛けてもらえ、日々副籍交流の意義を感じています。

〔小学部 第5学年 Oさん〕

1学期に1回のペースで朝の会に参加しています。息子が学校で行った活動などを担任の先生が写真付きのフリップにしてくださり、裏に書いてある文を息子が読み上げる形で紹介し、一緒に歌や簡単なゲームなどをしています。息子は多動傾向があるため、じっと活動に集中することはできませんが、息子がしたことによって拍手してもらえることが嬉しいようで、楽しんで活動しています。

副籍校の子どもたちはとても温かく迎えてくれてます。たまに通学路で会うと「〇〇さんだ」と声を掛けてもらうこともあり、障害児を怖がる子が少なく驚いています。本人にも副籍校にもお互いにより影響を与えていると思います。

〔中学部 第1学年 Sさん〕

最初には給食交流をしました。すごく緊張していましたが、副籍校の生徒数名が優しく名前を呼んで教室へエスコートしてくれました。話す内容も準備をしてくれており、食べながらうなずくのが精一杯ではありましたが、和やかな時間が流れました。

秋には合唱祭を見学に行きました。素敵な歌声に親子で感動して帰ってきました。

その他、数回放課後に本校の学校便り等を届けたのですが、毎回必ず担任の先生が優しく接してくださいました。娘はとても嬉しかったようです。たくさんの生徒さんと交流できたことは、娘にとってすごく刺激になり、よい経験になったと思います。こういう機会を与えてくださり、ありがとうございました。

I
小中一貫教育
理論編II
総合的な学び
理論編III
総合的な学び
実践編
就学前III
総合的な学び
実践編
小学校III
総合的な学び
実践編
中学校III
総合的な学び
実践編
特別支援IV
資料編

事例 4-2 杉並区立済美小学校（・かしのみ学級）

特別活動・総合的な学習の時間

単元名

小学校第1学年～第6学年

◆◆ みんなと生きる済美の子 ◆◆

～済美小の大事な一人になろう～

1 2030年を生きる子どもたちに身に付けさせたい力と教師・学校の役割

(1) 杉並区立済美小学校（・かしのみ学級）

杉並区立済美小学校は、杉並区の中でも有数の豊かな自然に恵まれた地にあり、学校と家庭・地域が一体となって教育活動を行ってきた歴史をもつ学校である。明治40年に今井恒郎氏が「日本済美学校」を設立したことをきっかけとし、今井政吉氏の「この地を末永く教育の場として残したい」という思いを受け、杉並区ではこの地を永久により教育を施す場とし、昭和28年に杉並区立済美小学校が誕生した。ちなみに、済美の名は、中国の古い文献『春秋左氏伝』からとったものであると言われている。特別支援教育の推進校として、隣接する大宮中学校、済美養護学校、社会福祉法人済美会（大宮ふれあいの家・こすもす生活園）等と様々な交流活動を行い、児童の豊かな心を育てている。

学校の本である「カシの木」から名付けられた知的固定特別支援学級「かしのみ学級」では、本校の教育目標として掲げられた「済美小の大事な一人になろう、みんなと生きる済美の子」の下、異学年や他校特別支援学級、子供園、障害者施設の方々との交流を通して、障害の有無に関わらず共存・共生を目指す特色ある教育活動を展開している。そして、通常学級の児童も、支援学級の児童も、中学校に進学しても、地域にいる障害をもった人たちと一緒に活動する機会を大切に、将来自分たちが地域で暮らしていくときに、この経験を生かして生活することができるように、様々な教育活動を設定している。

学校全体としても、研究活動が盛んな校風もあり、杉並区教育課題研究指定校の一つとして、人間的な触れ合いを深める交流活動、基礎的・基本的な学習内容の確実な定着、環境教育の推進、体力向上・食育推進、読書活動の推進等、子どもたち一人ひとりの力と可能性を様々な観点から伸ばすための教育実践を積み重ねてきた。グリーンカーテンの設置や芝生化した校庭など、緑化活動にも力を入れ、充実した教育環境を生かした様々な活動に取り組んでいる。

2 多様で一貫性のある総合的な学びにおける本単元の位置付け

	就学前	小学校			
		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
系統性	身近な人と親しむ。	関わり合う。			
連続性	関わりを深め、工夫したり協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。	①お互いについて知り 関わり合い進んで活動する。 ②共に楽しめる 活動を考える。 ④思いやり認め合い 活動を積み重ねる。			
協働	高齢者はじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しむ。	・見通しをもち計画的に行えるように、教育計画の中に『交流』の項目を作り、毎年引き継ぎ ・交流の初めは、かしのみ学級が主導で活動を計画し、回を重ねるにつれて、通常学級が主 ・済美養護学校やこすもす生活園とは、年度当初に打ち合わせをして年間計画を確認する。			



(2) 育成を目指す主な資質・能力
【小学校・中学校 共通の育みたい力】

関わり合い進んで活動する力
 自分の思いや考えをもち、実現させようとする力

互いを思いやり認め合う力
 互いの思いや考えを伝え合い、折り合いを付けたり、よりよい考えにまとめたりする力

【小学校】 学級活動を通して、培う力

関わり合う	・お互いを知る	・仲良くできる方法を考える
すすんで活動する	・分からないことを理解するための方法を身に付ける	・一緒に活動できる内容を考える
思いやり認め合う	・一人ひとりの存在を尊重する	・相手の気持ちを尊重する
	・互いに歩み寄る	

【中学校】 (小学校での体験を基に) 関わりすすんで活動し認め合える人間関係の形成

		中学校			系統性
第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年	
互いを思いやり支え認め合う。		関わり進んで活動し認め合える人間関係を形成する。			系統性
③校外との交流を 積み重ねる。					
ぐ。 になり、自分たちで相手のことを考えて計画を立てるなど、主体的に活動ができるようにする。					

- I 小中一貫教育 理論編
- II 総合的な学び 理論編
- III 総合的な学び 実践編 就学前
- III 総合的な学び 実践編 小学校
- III 総合的な学び 実践編 中学校
- III 総合的な学び 実践編 特別支援
- IV 資料編

3 学びを通じた成長

(1) 子どもたちの活動する姿

ア 第3学年児童とかしのみ学級の交流

○かしのみ学級について知る。

第3学年児童と、1年間の交流及び共同学習に取り組む。通常の学級の担任と、かしのみ学級担任で、交流学習の位置付けを確認し、双方の児童にとって学ぶ場となるよう年間計画を確認する。

交流を始めるに当たり、かしのみ学級担任が、児童へオリエンテーションを行う。

交流のイメージを教師と児童が共有できるようにこれまでの交流学習の実践事例を画像や動画などで視覚的に示し、「今年はどんな活動にしようかな。」という児童の意欲へつなげている。

かしのみ学級との交流活動に取り組む際、児童が相互理解に役立つように学級名からキーワードを作成し伝えている。

○活動の内容を紹介し、1年間の交流の見通しをもつ。

- ・ 写真を見せながら、これまでの活動を紹介する。
- ・ 第3学年児童にどんな関わりをしてほしいかを伝える。
- ・ これまでの交流活動の中でお互いが成長できた場面を具体的に伝える。
- ・ かしのみ学級児童については、自分のことを自分でしたり、支援が必要な時にはそのことを伝えたりできるように、成長と自立につながる活動になるよう教師の思いを伝える。

○班に分かれて、自己紹介をする。

- ・ お互いの名前を覚えられるように、質問したり、好きなものを伝え合ったり等の工夫を促す。

○班長、班の名前を決める。

- ・ 班ごとに話し合いを進める。
- ・ 班の名前を決める話し合いの様子を教師が丁寧に見取り、班名の候補を提案した理由等、他班の話し合う視点で有効なものを紹介していく。

○交流活動の内容について話し合う。

- ・ 班名や役割分担等が決定した班は、今年度の活動内容についてアイデア等があれば話し合うよう助言する。

○班で決まった名前を発表する。

- ・ 「楽しい」「スマイル」「にっこり」等、児童が命名した班名は活動のイメージを表現したような班名が例年多く見られる。
- ・ 全部で12班を作り年間の交流活動の基本集団とした。
- ・ 具体的にこんな活動にしたいという思いをもち始めた班の話し合いの様子を全体に伝え、児童の意欲につなげる。
- ・ 交流活動に期待をもてるよう、次回の活動を改めて伝える。
- ・ 第3学年児童の豊かな感性や前向きな姿勢等、交流活動を支える子どもたちのよさを担当教員同士で確認し合う。



イ 第3学年児童とかしのみ学級児童の年間交流例

時	主な学習活動 (配当時間)	・主な指導上の留意点	☆評価
1	かしのみ学級のみんなと仲良くなるよう	・覚えておいてほしいこと	☆班の友達を知り、一緒に活動する。 ☆観察したり、質問したりして理解する方法を身に付ける。
2	大豆を植えよう	・分担や協力の仕方	
3	梅拾いをしよう	・力を合わせて拾うこと	
4	一緒に遊ぼう	・仲良くなるように	
5	枝豆と梅ジュースパーティーをしよう	・上手に仲良く分けること	

6	養護学校との合同交流の準備をしよう	・危険のないような遊び方	☆友達のことを考えて、 交流の計画を立てる。 ☆自分ができることを考 えて一緒に活動する。
7	合同交流会をしよう	・動きが早いと危ないこと	
8	豆まき交流	・友達ががんばることを応援	
9	学級ごとに交流しよう	・できることを計画	
10	学年で交流しよう	・楽しめることを計画	

※年間計画の基本は教師が活動の目標に即して設計する。その上で、児童から提案されたアイデアや感想等を活動の様子として各便り等を活用して伝えている。

※交流活動を進める中で、児童が主体的に活動するために思考し続けられるよう、様々な思いを紹介することで、みんなの思いが生かされる交流活動になるよう留意する。

(2) 子どもたちの成長

ア 「仲良く一緒に遊ぼう」第3学年の児童とかしのみ学級（9・10時間目）

- 第3学年の児童が遊びの計画を立て、3学期に実施する。
- 司会、初めの言葉、遊びのルール説明、終わりの言葉など、役割を決めて取り組む。
- かしのみ学級の第1学年の児童も一緒に楽しめる遊びをみんなで相談し内容を決定する。
- イス取りゲーム、ハンカチ落とし、爆弾ゲーム、じゃんけん列車など、みんなで遊ぶ。同じ班の友達には、積極的に声を掛けるなど、交流活動には児童一人一人に目標をもたせ、活動後の振り返りに活用する。
- 体育館では、手つなぎ鬼、オセロゲーム、大根抜き等ダイナミックに体を動かせる内容を考えた班が多く見られた。
- 班対抗で、協力をテーマに取り組んでいる班も見られた。
- 終わりの言葉では、1年間を振り返り、楽しかったことや交流を通して知ったことなどを相互に伝え合い、「これからも仲良くしましょう。」と今後について考えたりしたことを伝える。



イ 「済美養護学校との交流会をしよう」第4学年と済美養護学校

- 2学期に2回交流会を実施する。
- 司会、ゲームの担当、初めの言葉、終わりの言葉などの担当を済美小学校で分担し、交流会を進める。
- 済美小学校からは、済美養護学校からのリクエストで合唱や運動会の表現を出し物で行うこともある。
- ゲームは、済美養護学校のみならずみんなも楽しめるものを考える。「じゃんけん列車」や「猛獣狩りに行こう」を行うことが多いが初めから決まっているものをやるのではなく、児童が多くのゲームの中から、条件を満たす活動を考え出して決めて行く過程を大切にする。
- 「じゃんけん列車」では、できるだけ済美小学校と済美養護学校の児童がじゃんけんをするように声を掛けて行う。「猛獣狩りに行こう」では、グループを作るときに、必ず、済美養護学校の児童が入るようにグループを作り、作ったグループで握手をしたり、ハイタッチをしたりして関わりがもてる工夫をする。
- 年間を通して交流を行うことで、名前を覚え、登下校で会った時には気軽に声を掛けている姿も見られるようになった。



I
小中一貫教育
理論編

II
総合的な学び
理論編

III
総合的な学び
実践編
就学前

III
総合的な学び
実践編
小学校

III
総合的な学び
実践編
中学校

III
総合的な学び
実践編
特別支援

IV
資料編

4 学びのつながり、人の生かし合い

(1) 学びのつながり

ア 学校と社会をつなぐ学び（社会に開かれた教育課程）

系統的な交流活動を通して、児童が自らの目標を設定し、一緒に活動する仲間と取り組むことができる活動を考える。自ら考え、思いをもって実践していくことで、自分たちが生活していく地域の在り方について主体的・協働的に考え続けていくことにつながる。

イ 系統性・連続性を確保した学び

①指導目標・内容（事項）の【系統性】

学年	主な交流相手	内容
第1学年	同じ学年のかしのみ学級の児童	入学式、1年生を迎える会、遠足、運動会、生活科見学、マラソン大会 学校探検、安全教室、入学式の歓迎の出し物
第2学年	同じ学年のかしのみ学級の児童	入学式の歓迎の出し物、遠足、運動会、生活科見学、マラソン大会、 学校探検、消防自動車写生会
第3学年	★かしのみ学級	遠足、ヤゴの救出大作戦 自転車教室 社会科見学、マラソン大会、 済美養護学校との交流会 ★交流班を作って、年間を通じての交流学习
第4学年	★済美養護学校 同じ学年のかしのみ学級の児童	遠足、(自転車教室)、水道キャラバン、演劇鑑賞教室、防災館見学、 社会科見学 年間6回実施。済美養護学校の高学年児童との交流で、歌や楽器の発表、ゲームやダンスなどを企画して交流。済美養護学校の交流会
第5学年	同じ学年のかしのみ学級の児童 こすもす生活園	音楽鑑賞教室、着衣泳、運動会、連合音楽会に向けて音楽交流、 連合音楽会、卒業式 こすもす生活園でのボランティア活動、交流活動
第6学年	同じ学年のかしのみ学級の児童 こすもす生活園	着衣泳、移動教室、分区連合運動会、地域清掃、6年生を送る会練習、 お別れバイキング給食、卒業式 こすもす生活園でのボランティア活動、交流活動

かしのみ学級の児童は、校内の学年ごとに交流学級を設け、遠足、運動会などの学校行事等も一緒に行っている。日常的な交流活動としては、給食交流「なかよし給食」を行う。通常の学級でも、近隣の学校や様々な施設と交流活動を進めている。第1学年は子供園や保育園、第2学年は大宮ふれあいの家、第3学年はかしのみ学級、第4学年は済美養護学校、第5・6学年はこすもす生活園との交流を行うことで、発達段階に即した教育活動となるよう工夫する。

②学習と評価の方法の【連続性】

年間を通した取組は、6年間で繰り返していくものも多く、この積み重ねにより、今までの経験を生かした考え方や活動が上の学年になるにつれてできるようになることを想定して計画されている。

かしのみ学級においても同様に、第3学年とかしのみ学級との交流や、第4学年と済美養護学校との交流計画を立て、活動を積み重ねている。初めは、かしのみ学級や養護学校がリードして計画し、通常の学級がリードする形に移行していくことで、児童が見通しをもって自分たちで考えて計画を立てる活動を取り入れている。高学年になると、学校行事や委員会活動などで、同じ学年のかしのみ学級の児童との活動の時間数は若干増える一方、こすもす生活園との活動時間などは限られていく。そこで中学年での交流経験を生かし、短い時間の中でも計画や活動につなげているかを丁寧に見取る。

③教科等横断的な学び

生活科、社会科、音楽科、体育科、特別活動を交流の目的と形態に即して横断的に設定することで、各教科での学びを生かす場として設定している。

④主体的・対話的で深い学び

通常の学級の児童には、かしのみ学級児童との活動を通して、自分たちと同じように感じる心があるこ

とやとても苦手なことがあっても頑張って学校生活を送っていることを伝える。そして、共に生活していることを、体験を通して実感し、人と人の望ましい関係の在り方について考えていくことができる。

かしのみ学級の児童にとっても、交流は楽しみな時間になっている。普段とは違う緊張感を感じている児童もみられるが、声を掛けてもらったり、自分から話しかけたり、一緒に遊んだりすることは、児童にとって嬉しい体験となっている。そして、通常の学級の児童も、かしのみ学級の児童も、中学校に進学しても、地域で暮らす障害のある人たちと一緒に活動する機会を大切に、将来自分たちが地域で暮らしていくときに、この経験を生かして生活することが可能となる。

⑤過去・現在・未来の学びをつなぐ評価

- ・ よりよく問題を解決する資質や能力として、お互いを知り、どうやったら仲良くできるか考え続けることができる。
- ・ 分からないことは、観察したり質問をしたりして理解する方法を身に付け、学び方やものの考え方を学ぶ。
- ・ 主体的、対話的、協働的に取り組む態度としては三点挙げることができる。
 - ①自分から関わろうとする態度を身に付ける。
 - ②一緒に活動できる内容を考えようとする。
 - ③相手のことを考えて交流の内容や約束を決めようとする。
- ・ 自己の生き方として、同じ学校や地域にはいろいろな立場の人がいることを知り、みんなと一緒に生きる中で、自分ができることを考える。

(2) 人の生かし合い

ア 学校外

- ・ 第5・6学年でのこすもす園、大宮ふれあいの家との高齢者交流活動の取組。肢体不自由な障害のある高齢者とも触れ合うことを通して、地域や社会への関心を高める。

イ 異校種間

- ・ 鯉のぼり集会等、季節感を味わいながら参加する済美養護学校との異学年交流の取組。
- ・ 副籍制度を活用した直接交流（同学年での交流）の取組。特別活動の時間を活用して、風船バレーを一緒に楽しむ等、児童相互にとって触れ合う必然性のある活動を設定している。

ウ 自校内

年度当初に、固定の交流学級を決め、全校朝会や集会では、同じ列に整列したり、給食を一緒に食べるなかよし給食を行ったりしている。また、遠足や運動会などの学校行事は一緒に参加し、第1学年から段階的に交流を進めることで、支援学級の児童のことを理解して受け入れ、一緒に学習したり、活動したりすることが自然にできるよう計画的に取り組んでいる。



済美小学校第3・4学年の児童、かしのみ学級の児童、済美養護学校の児童が集まって合同交流会をしました。こんなにたくさんの人たちがいると、ドキドキするけど、一緒に活動して、お互いに仲良くなりたいな。



済美養護学校で行われた鯉のぼり集会に参加したよ。善福寺川に飾られる鯉のぼりは、遠くから見ているから大きな魚ぐらいかと思っていたけれど、実物はこんなに大きいんだなあ。
体育館の端から端までであるよ。
今年も空に泳いでいるところを、見に行きたいなあ。

◆◆ みんなと同じ心があるよ ◆◆

「あれ。〇〇くん、今日はお休みなの。どうしたの。」

一緒に交流しているかしのみ学級の児童が、交流学習で姿が見えないときなど、すぐに気が付いて声を掛けてくれる子が今ではたくさんいる済美小学校です。

そして、全校朝会などで、辛そうな様子を見たり、大きな声を出してしまっても、じろじろ見たり注意をしたりするのではなく、「そんなこともあるよね。」と見守る姿が当たり前になっています。

1年生の交流をスタートするとき、そして、3年生で年間を通じた交流をするときに、「かしのみ」の文字を使って、かしのみ学級の担任から話をします。

【か】は、**顔を見て話しかけて**です。

『「おはよう。」と声をかけても、自分に言われているか分からないことがあるからね。「〇〇さん」と名前を読んで、顔が見えるところで話すと分かりますよ。決して、無視をしているわけではありません。挨拶しても自分だと気付かず、返せない児童がいることがあります。』

【し】は、**心配しないで**です。

『泣いていることがあったり、怒っていることがあったり、大きな声を出していることがあったりするかもしれないけど、何か分からないことがあったら、先生たちが周りにたくさんいるので相談してください。心配しなくても大丈夫です。』

【の】は、**のんびり待って**です。

『ゆっくりでも、自分の力でできることがたくさんあります。親切な子は代わりにやってくれたり、手伝ってくれたりすることがあります。とってもありがたいのだけれど、自分でできるようにがんばっているときは、見守ってくれると嬉しいです。』

【み】は、**みんなと同じ心があるよ**です。

『皆さんは、悪口を言われていたらどんな気持ちになりますか。かしのみ学級のお友達も、悪口やいやなことを言われたときに、黙っていたり、怒っていないように見えたりしても、「いやだな」と思う気持ちは同じです。そして、楽しいときや嬉しいときも、みんなと同じような気持ちになります。言えなかったり、見て分からなかったりするときもあります。だから、同じ心があることを忘れないでくださいね。』

と、こんな話をして活動をしていきます。

交流に行くとき、かしのみ学級の児童の中には、「大丈夫かな。」と心配な気持ちをもっている場合があります。しかし、「今日は、かしのみ学級の皆さんが来てくれましたよ。一緒に学習できて嬉しいです。」という担任の先生の一言で、安心して一緒に給食を食べたり、学習に参加したりすることができます。担任の先生たちが、事前にも事後にも子どもたちに話をしてくれているからこそ、スムーズに活動ができ、次につながっています。大人の姿を見て、子どもたちは人との接し方を学びます。そして、子どもたちの垣根のない受け入れる力に、大人も学ばされ励まされます。

先生の前では、悪口を言ったりしないのですが、子どもたち同士の関わりの中で、嫌なことを言ったり、トラブルになったりする場面もあります。それでも、関わり合うことをしなければ、相手を理解することはできません。本当に自然に関われるようになるには、本当のインクルーシブとは、と考えるながら交流を続け、広げつなげていければと思っています。